

高千穂遙

黄金のアポロ





黄金のアポロ

高千穂 遙

角川書店



黄金のアポロ

昭和五十七年一月三十日 初版発行

著者 高千穂遙

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京〇三―二六五―七一一 大代表

振替東京三一―九五二〇八 郵便番号一〇二

大日本印刷・鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

0093―872336―0946(0) Printed in Japan

© HARUKA TAKACHIH0 1982

目次

第一章 パンクラティオン

五

第二章 ファランクス

四一

第三章 バルバロイ

四三

第四章 オリュン波斯

一三三

第五章 ミューズ

一六五

あとがき

二三四

装丁
加藤直之

黄金のアポロ

偉大な格闘士たちに。そして、かれらを讀える人びとにも……。

第一章 パンクラティオン

1

風が熱を帯びていた。

神官たちによるボディチェックを終えたレオン・セラトスは、脱衣場で衣服をすべて脱ぎ捨てると、全裸のまま、まっすぐに塗油室へと向かった。

塗油室には、五人の男がいた。三人が闘士で、二人が平民^{ポロイ}だった。闘士の中には、マドラー・バルザンテスの童顔もあった。

「やあ、レオン……」

はいつてきたレオンを見て、マドラーが片手を挙げ、人なつっこい笑みを浮かべた。ほかの四人も首をめぐらし、軽く会釈をした。しかし、表情は変えなかった。視線をすぐに戻して、またとりとめもない噂話^{うわさばなし}をはじめた。意識してレオンを避けている風情が、かれらにはあった。

レオンは無言でかれらの挨拶^{あいさつ}にこたえ、ゆっくりと歩を進めて、中央のベンチに腰をおろした。

マドラーがやってきた。

「香油を塗らせてくれないかな……」

遠慮がちにそう言った。

レオンはおもてを上げ、この一年後輩の闘士の顔をじつと見つめた。

マドラーは、白いチュニックを身につけていた。きょうは今年のトーナメントの最終日である。かれの試合はない。試合はメインイベントを除けば全部エキジビション・マッチになっている。四回戦で敗退したマドラーに出場資格は与えられないのだ。

してみると、マドラーはレオンに香油を塗りたいがためだけに、ここへ来たということになる。

「そうか……」

レオンはベンチにその遅い^{おそ}からだを横たえ、うつ伏せになった。

「塗ってくれ」

素っ気なく言った。

「ああ」

マドラーはベンチの下^{した}のひきだしを開けて香油の壺^{ひん}を取り出し、中の液体をレオンの背に、たっぷりとふりかけた。香油の匂^{にお}いが、つんと鼻をついた。マドラーの両

の手が、香油を塗り伸ばしながら、レオンの盛り上がった筋肉をいいねいにもみほぐした。筋肉は、岩塊に似た鋭い外見にもかかわらず、驚くほど柔軟だった。

広背筋からはじめて僧帽筋に移り、そこからくだって腹側筋、大臀筋へとマッサージはすすんだ。レオンの浅黒い肌が深い艶を帯び、照明の淡い光を反射して眩く輝いた。全身に残る無数の傷痕が、その輝きをいつそう華やかなものにした。

「スタディオンは、超満員だ」マッサージの手を休めずに、マドラーが言った。「通路が立見の市民であふれている」

「……………」

レオンは反応を示さなかった。マドラーは独り言をつづけた。

「きょうの試合は、アポロのタイトルマッチじゃない。十二年ぶりの決定戦だ。だから、市民はひどく興奮している。ポリスはレオン派とリゲル派に分れて、真つ二つだ。噂によると、セルベテスなどの大物貴族でさえ、どちらが黄金のアポロとなるかを予想しかねているらしい」

「……………」

「仰向けになってくれるかい？」

くるぶしまで香油を塗り終え、マドラーはレオンの肩を軽く叩いた。

レオンはかすかにうなずき、ベンチの上でからだを半回転させた。

マドラーが、またレオンの胸に香油を注いだ。

「きょうは暑いな……………」

レオンが口を開いた。

「え？」

マドラーの手の動きが止まった。いぶかしむようにレオンの顔を見た。ふたりの目と目が合った。

「きょうは暑いな、と言ったのだ」低い声で、レオンは繰り返した。「空気に熱がこもっている。風までが息苦しい」

「あ、ああ……………」

マドラーは二、三度、首を縦に振った。ポリスの英雄が放つ言葉は、かれを必要以上にうろたえさせる。

マドラーの両手が、香油を広げ、レオンの筋肉をマッサージする作業に戻った。

「朝からニュース・パネルが喚いていた」マドラーは言った。「昼には気温が四十度近くになるそうだ」

「四十度か……」レオンは短く笑った。「リゲルには気の毒な話だ」

「試合が長びけば、あなたが有利になる」

「……………」

「勝てば、黄金のアポロだ」

「俺はテリーを倒して、黄金のアポロになるつもりだった……」

視線を宙空に漂わせ、レオンは言った。マドラーの指は、大胸筋から腹直筋をもみほぐしている。

「——十一年もの長きにわたって黄金のアポロの座に君臨したテリー・オライドスが、あのようにあっけなく病死してしまうとは、想像だにしなかった」

「わたしも、テリーはスタディオオンで、その栄光ある死を迎えるものと思っていた」

「俺とリゲルとが、黄金のアポロを争うことになるのはな。皮肉なものだ、運命とは……」

「リゲルはキャリアが長い。人望もある。メルオニス家の若手は、みなかれの方について」

「やつは相手に花をもたせるすべを知っている。若手に練習を強要することもない。俺はただ勝負、勝負、勝負、だ」レオンは自嘲するように言った。「これでやつが弱

ければ、どうということはないのだが、不思議なことにやつは強い。からだにも体力にも恵まれている」

「バンクラティオンは命を賭けた市民の試合だ。ペリオイコイの遊びじゃない。わたしは、あなたの生き方に強く惹かれてる」

「だから、こちらへ来たのか？」

レオンは上体を起こし、若手で最強と目されている若者の横顔をじっと見た。マッサージは下腿二頭筋にかかっており、もうおわりに近い。

「そうだ！」マドラーは大きくうなずいた。「わたしは、あなたに勝ってもらいたい。最強の闘士が誰で、真の黄金のアポロが誰であるかを市民に正しく知ってもらいたい」

「熱いのは風ばかりではないな……」

レオンは苦笑した。

マッサージがおわった。

レオンはベンチからおり、足をわずかに開いて立った。静かに深呼吸をした。腹直筋が波打ち、ゆっくりと大胸筋がバンブアップした。

腰に両手をあて、広背筋を広げた。レオンの背に、にわかに羽が生じたかのようにそれは広がった。香油を塗

られたばかりの肌が、赤銅色にてらてらと光った。深呼吸は、さらにつづいた。

やがて、血液がもみほぐされたレオンの筋肉のすみずみに行き渡った。

ボリスに並ぶ者なしと讃えられた最高の肉体が、そこに立っていた。

肩に高く盛り上がる僧帽筋と三角筋。太い腕は上膊筋と前膊筋によってかたちづくられ、胸と背は途方もないバルクの大胸筋と広背筋とに厚く鎧われている。鋸状筋は深く峻烈で、八つに分れた腹直筋はその切れ味が、あまりにも鋭い。腰はすずめ蜂のそのように細く、大腎筋はこれ以上ないほどに強く引き締まっている。

上体を支える大腿四頭筋は、どちらかといえば猛々しく、荒けずりだった。しかし、それがレオンのからだの美しさを減ずるものではけっしてない。むしろ、その猛々しさこそが、闘士としての強さをきわだたせている。そして、驚異的なバネを秘めた下腿筋だ。ふくらはぎが大きく脹らみ、足首は逆にやさしさを感じさせるほどに細い。

神がこの世に生み出した唯一の傑作。

それこそが、このレオン・セラトスの肉体だった。

「これを……」

マドラーが、真新しい下帯をレオンの前に差し出した。レオンはそれを受け取り、腰に巻きつけた。

いつの間にか、塗油室にいたのはレオンとマドラーの二人だけになっていた。

「失礼します……」

若い神官が、塗油室にはいつてきた。丈の長いゆつたりした衣服を身につけている。

「まもなく試合がはじまります。控えの間においで下さい」

レオンの姿を認め、そう言った。

「勝利を祈っている……」

マドラーが言った。

「……………」

レオンは口を開かなかった。

わずかにマドラーを一瞥しただけだった。

きびずを返し、レオン・セラトスは塗油室をあとにした。

2

華やかなファンファーレが響き渡った。

レオンの眼前で、ゆっくりと獅子の門が開いた。眩い光が、控えの間に射しこんできた。

馴れるまで、両の眼がかすかにうずいた。時刻は午後二時。快晴の空はあくまでも蒼く、明るい。

レオン・セラトスを讃える曲がはじまった。

神官が、場内に進むようレオンをうながした。

獅子の門をくぐり、闘技場へと出た。

わーんと、耳が鳴った。

音楽が掻き消された。

歓声が、まさしくスタディオンを揺るがしていた。マドラーが言ったのは本当だった。スタディオンの観客席は超満員だった。通路も完全に埋め尽くされ、人の頭と肩以外に見えるものは何もない。観客は案に十万人をこえているだろう。その十万人のほとんども、声を限りに声援を送っているのだ。

レオンは右手を高く挙げ、観客にこたえた。

歓声が、さらに大きくなった。

手を振り、左右に視線を移してレオンは前進した。スタディオンの底には熱気がこもる。香油を塗ったレオンの肌に、おびただしい汗がふきだした。汗は香油に弾かれ、ふきだすと同時に玉となった。汗の玉は強烈な陽光を反射し、レオンの肉体はあたかも純金の彫像のようにきらきらと輝いた。

闘技場の中央にしつらえられた二十メートル四方の白いマットの端に着いた。

レオンは歩みを止めた。

歓声が、潮の引くように熄んだ。

新たな曲——リゲル・コロボーンを讃える曲が場内に鳴り響いた。

レオンの正面に竜の門があった。

竜の門が開いた。

巨大な男が姿をあらわした。

再びどよめきと歓声がスタディオンを包んだ。十万人々は、今ひとりの英雄、リゲル・コロボーンの名を声高に叫んだ。

風がふるえ、大地が鳴轟した。

リゲルが太股に歩を運ぶ。

その背はセレスの塔のように高く、その肩はアーサス

の川のごとく広い。そして、その腕はゼウスの神殿を支える青銅の柱よりもまだ太い。

神々のつくりたもうた最大の巨人。

リゲル・コロボーンは長い両腕を頭上に挙げ、観客の歓呼に応じた。

レオンの三分の二の歩数で、リゲルはマットの西の端に至った。

年老いた神官が、南の端からマットの上にあがった。

勇者の血を象徴する真紅の衣を着た神官は、マットを清め、そののちの采配を、きょうのこの試合をとりしきるタリシウス家の当主に委ねる。

スタディオンの喧騒が、ひとまず鎮まった。

神官がマットの中央に進んだ。

低い声で、祈りの言葉を捧げた。衣にマイクがしこんであり、神官の声はスタディオンのスピーカーを通じて観客の耳に届く。

祈りの言葉は数分でおわり、神官はつづいてタリシウス家の当主の名を呼んだ。

「神々の王にして偉大なる雷神ゼウスの尊き血をその体内に宿すタリシウス家の当主、カロン・タリシウスよ……」

スタディオンの北側には巨大な表示スクリーンが立っている。その下の席はすべて貴族の専用席であり、ペリオイコイはもちろんのこと、たとえ市民であっても立ち入ることはできない。

カロン・タリシウスは、貴賓席の最下段にいた。

立ち上がり、神官の呼びかけにこたえた。

小男だが、ボリスの掟に従い、その体軀は見事に鍛え上げられている。たとえ太古の血を引く貴族といえども、ボリスの掟には逆らうことはできないのだ。鍛練を怠り、神々よりたまわった肉体を醜く衰えさせた者は、貴族、市民を問わず、その資格を剝奪され、ペリオイコイの身分におとされる。

観客の間から、カロン・タリシウスを讃える拍手が沸きおこった。

拍手のおさまるのを待って、神官が言葉を継いだ。

「……ただ今より、二人の誇り高き闘士が、おのが命を賭してその技を競う。勝者に与えられるものは、ただ月桂樹の冠と黄金のアポロの称号のみ。——カロン・タリシウスよ、かれらに祝福の御言葉を……」

カロン・タリシウスが、左手を軽く挙げ、優雅に頸を引いた。かれの姿は、スタディオンに集まったすべての

者の目に触れるように、巨大な表示スクリーンに映像として映しだされている。

おもむろに口を開いた。

「神々ならびにポリスに忠誠を誓う闘士たちよ、ゼウスの見守りしこの場において、タリシウス家当主、カロン・タリシウスは宣する。この試合の勝者は、第二十一代の黄金のアポロとなる！」

礼砲が轟いた。またび、大歓声がスタディオンを覆った。カロン・タリシウスは満足気に手を振り、シートに腰をおろした。

スタディオンは、真つ二つに割れていた。

東の席の者はレオンを応援する。西の席の者は、リゲルのために声を震らす。ともにそれぞれの支持する闘士の名を呼び、その熱狂はとどまるところを知らない。

老神官が貴賓席に向かって一礼し、身振りでレオンとリゲルをマットの中央に招いた。

両雄が、数歩の距離を置いて対峙した。観客の声援は、いよいよかまびすしい。スタディオンの底にあたるマットの上では、どんなに大声を発しようとも、まったく聞きとることができない。

老神官が二人の下帯をあらため、次に反則を犯さぬと

いう神への誓いを立てさせた。パンクラティオンのルールは単純である。反則はふたつしかない。噛みつくことと眼を扶（さぐ）ることである。これ以外のことなら何をしても良いのだ。たとえ首を絞めようとも、股間の急所を打とうとも、止められはしない。

試合はどちらかがギブ・アップするか、もしくは死ぬことによって終了する。制限時間はない。ギブ・アップもせず、死にもしないのなら、試合は二日であろうと三日であろうと休みなくつづけられる。しかし、現実には、そのすべての試合が、一時間以内におわっている。これまでの最長の試合は、第十九代の黄金のアポロ、ラモス・グレイドンがテリー・オライドスに敗れた試合で、試合時間は四十八分三十二秒であった。

老神官が、マットを降りた。

マットに立つのは、レオンとリゲルの二人だけになった。

試合開始を告げる電子音が、高らかに鳴り響いた。観客の昂奮が絶頂に達した。

互いの眼を見つめ、二人は間合いを測った。

距離を詰めないまま、二人は右方向に回りはじめた。双眸が鋭い光を帯びている。かすかな隙（ひま）すらも見逃さな

い野獣の眼だ。

観客のコールするレオンの名とリゲルの名がからみ合
い、一体となってマットの上に降ってくる。

回りながら、じりじりと二人は接近した。

リゲルが、口の端に薄い笑いを浮かべている。

レオンの頭はリゲルの胸までしかなかった。けっして
レオンが短^{たか}軀だからではない。むしろその逆だ。レオン
はリゲルを除けば、闘士の中でもっとも背が高い。

リゲルが巨大すぎるのだ。その巨大さゆえにリゲルは
さしたるトレーニングもせずに、トップクラスにのしあ
がった。しかし、その巨大さゆえに、スピードに勝るテ
リー・オライドスにリゲルは五年も負けつづけたのだ。

二人は油断なく回った。少しでも気をそらせば、先手
を取られることは明らかだった。パンクラティオンのよ
うな単純なルールの格闘技では、先手を取られることは
即、敗北につながる。

問合いが、充分にせばまった。

足を止め、二人の上位がしなった。

次の瞬間、二人は四つに組んだ。

動きは、たしかにレオンの方が速かった。だが、力は
リゲルが上だった。

リゲルの両腕が、レオンを突き放した。

レオンは後方へ大きく飛ばされ、よろめいて倒れかけ
た。

リゲルが突進してきた。タックルだ。これをまともに
受けては、ダメージが大きすぎる。

レオンは左足でマットにふんばり、その反動を利用し
て右に跳んだ。

リゲルの巨体が、レオンの左肩をかすめた。リゲルは
たたらを踏んで止まり、くると向きを変えた。

その隙を逃さず、レオンの右回し蹴^{けり}りが、リゲルの左
大腿をカウンターで狙^{ねら}った。

リゲルが悲鳴をあげ、バランスを崩した。レオンは素
早く二撃目を繰り出した。これもヒットした。リゲルは
足をおさえ、後じさった。レオンはそれを追い、さらに
三撃目の回し蹴りを放った。

だが、これはあっけなくかわされた。リゲルの左腕が、
伸びてきたレオンの足を上にすくったのだ。

レオンは仰向けに倒れ、背中からマットに落ちた。

リゲルが助走をつけ、思いきり跳んだ。リゲルの巨体
が宙に舞った。落下地点には、仰向けに転がったレオン
のからだがある。

レオンはマットを右手ではたき、左に転がった。耳をつんぎく音と、激しいショックとともに、リゲルのからだがマットにめりこんだ。

あやうく難を逃れたレオンは、勢いよく立ち上がった。リゲルも、のろのろと立ち上がる。

レオンは飛び蹴りにいった。一か八かの技だった。体格に勝るリゲルには、ふつうの技は効かない。使えるのは、飛び蹴りのような捨て身技だけだ。

しかし、レオンの目論見はずれた。

リゲルが飛び蹴りをかわしたのだ。

体を右に開き、逆にレオンのからだを太い両腕でがっちり抱えこんだ。

レオンの息が詰まった。

反射的にレオンは右肘をリゲルの顔面に叩きこんでいた。レオンの右肘は鍛え抜いてあり、凶器に等しい。

レオンを絞めあげるリゲルの腕の力が弱くなった。レオンはリゲルの腕の中から抜け出し、間合いを取った。

リゲルは額をおさえていた。血が指の間から流れだし、マットに落ちて赤い汚染をつくった。

額が割れたのだ。リゲルの顔面が、朱に染まっている。リゲルが咆えた。

3

しばらくレオンは、リゲルの様子を窺った。

額の傷は、リゲルのダメージになっていなかった。かえって巨人の戦闘意欲を燃えあがらせただけだった。リゲルは猛り狂い、レオンのからだをふたつに引き裂こうと、がむしゃらに突っこんできた。レオンに利があるとすれば、その気負いを逆用することだった。

レオンは前にでてきたリゲルの頬を平手で張った。侮辱を与えたのである。ガードも何もないから、張るのはたやすかった。

案の上、リゲルは逆上した。髪を掻きむしり、怒りに全身を赤くした。

レオンに殴りかかってきた。

パンチをかわし、レオンはするりと背後にもぐりこんだ。リゲルはレオンの姿を見失い、あわてて左右に首をめぐらした。

レオンは高く跳び、リゲルの後頭部に全体重をのせた膝蹴りをみまった。

ガクンとリゲルの巨体が揺れた。